

もくじ

勝専寺 千手観世音御分身…P1 千住・足立の武士と町人・百姓(中)…P2

新常設展示紹介④あだちふるさと食堂…P4



新しく勝専寺に造立された千手観世音 御分身

はじめに

去る令和七年(二〇二五)
十二月十八日(木)、千住の

赤門寺として知られる勝専寺の本堂前で、
「千手観世音 御分身」(以下「御分身」
とします)の開眼式が、御住職の水野了
信師によって行われました。

〔千住宿400年記念〕

勝専寺 千手観世音 御分身の建立

ごぶんしん

郷土博物館

足立史談

第695号

2026年1月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

そこで、千手観音と地名由来につ
いてご紹介します。

御分身について

秘仏の木造千手観音立像(足立区
登録文化財)は千住の地名由来とし
て知られていますが、千住宿四〇〇
年の盛況とともに千手観音への参詣
希望者が増えたことから、誰でも参
拝できるように、本堂前に石造の「御
分身」が建立されました。昨年五月の
着想にもかかわらず十一月に建立で
きたのは、千住宿開宿四〇〇年に間
に合うような願いがあったとのこ
とです。なお像の前にある石柱に示
された「千手観世音」の文字は、足立
史談会会長の相川謹之助氏の筆です。
この御分身は茨城県の真壁石(花
崗岩)で作られ、全高は約一四〇cm、
像高約一一〇cmで台座が約三〇cmの
大きさです。

地名由来の史料

勝専寺の千手観音は江戸時代から
知られた千住の地名由来の有力説で
した。とくに高田與清(たかだ・と
もきよ)の次の一文が有名です。

高田與清「鹿嶋日記」

文政三年(一八二〇)九月七日の項

・千住の宿にいたる。

千住というは、もと千手の

あやまりにて、千手観音堂

ありけんに起れる名・・

(早稲田大学図書館蔵)

文中の「千手観音堂」は勝専寺の
ことで、しばしば史料に登場します。

與清(一七八三〜一八四七)は、
江戸時代後期の人で、小山田與清の
名でも知られた歌人・国学者です。

戯作者・大田南畝、漢詩人・大窪詩
仏らと交流し水戸藩主・徳川斉昭の
招聘により小石川にあった江戸の彰
考館に出仕し、彼が蒐集した五万巻
の蔵書をほこる擁書楼も著名でした。

彼の千住の地名に関する考察は広
く知られるようになり、江戸の地誌
『砂子の残月』(天保九・一八三八
年頃)にも引用掲載されたほか、十
返舎一九の滑稽本『奥羽一覽道中膝
栗毛』(弘化五・一八四八年版)で
も、歌枕風に千手観音が紹介される
など、様々な書で知られるようにな
りました。

おまえだち

「御前立」と「御分身」

博物館の展覧会「千住宿四〇〇
年」(一月十一日終了)では、メイ
ンビジュアルとして同寺が令和五年
(二〇二三)に制作した御前立を現
代の仏教彫刻としてご紹介しました。

令和元年(二〇一八)〜二〇一九(二〇二〇)

、木造千手観音立像の修復で、
勝専寺との縁が出来た東京藝術大学
の藪内佐斗司先生にお願いした御前立
は、美術作品として人気を博しました。
御前立は、郷土博物館で開催され



御分身の開眼式は、観音様の縁日である十八日(十二月)に関係者出席のもと開催されました。式の最後に御住職から建立経緯と趣旨(巻頭に掲載)のお話があり、参加者一同で勝専寺の歴史とともに、千住宿の歴史を伝える新しい御像の開眼を寿ぎました。

ぜひ同寺をお訪ねください。

開眼式

た特別展「千住宿四〇〇年」が初の一般公開となりました。貴重な彫刻作品でもあることから普段は寺坊内に安置されています。



展示会場での「御前立」

千住・足立の 武士と町人・百姓(中)

多田 文夫

4 「半農半士」の人々

百姓・町人と武士の二つの身分を併せ持つ人々については、はやく小野武雄が『郷土制度の研究』(大岡山書店、一九二五年)で「一見百姓でも亦武士でもない所謂半農半士の制度」が関東にあったことを述べています。また最近では鈴木直樹『近世関東の郷土と地域社会』(吉川弘文館、二〇一九年)によって広く郷土の存在形態が紹介されました。郷土博物館でも『名家のかがやきー近郊郷土の美と文芸』(二〇二〇年)で小右衛門新田の日比谷家や千住掃部宿の石出家を「郷土」(とし)として取り上げています。

関東の地域社会の特徴として「郷土」については事例の蓄積が進められ、今後、一般化していくでしょう。前回、千住で名字帯刀しつつ代官手代となっていた人々の姿をご紹介しました。そこで今回は足立のほかの地域―農村地帯―の例を取り上げてみたいと思います。

■「郷土」の阿出川氏

まず最初に紹介する阿出川氏は、宮城村や堀之内村、本木村の有力百姓として知られています。阿出川氏のことに触れた次の一文、江戸幕府が編さんした

『新編武蔵風土記』の堀之内村の記述からご紹介します。

旧家者、阿出川幸之進 先祖を越前守といい小田原の北條氏に仕えていたが、北條氏が没落したあと、ここ(堀之内村)に来て住んだと言い伝えている。今も、子孫は「郷土」と呼んでおり、名字を称して帯刀している。

この記事で阿出川氏は名字帯刀した「郷土」として紹介されています。阿出川氏は幸之進のほかにも小菅御殿地の管理などで幕府の役を担っ



河内屋敷(現竹の塚一丁目16~19番付近)
構堀遺構があったころの空中写真(昭和33・1958年)

ていたことが確認できます。代官伊奈忠高（友之助）は文政六年（天保十三年（一八二二～四二）の間、関東の代官を務めた人物ですが、「阿出川平左衛門」が「伊奈友之助手代」として登場します。職務は小菅御殿跡地の管理の実務者でした。区内の古文書のほか「小菅初蔵関係文書」の中でも頻出します。

阿出川幸之進の『新編武蔵風土記』の情報は文政五年（一八二二）ですし、阿出川平左衛門も同じ頃に活躍した代官手代でした。

阿出川氏は性翁寺（扇二丁目）に墓所があり、武家風の墓石とともに、郷士だったことをうかがわせます。

【参照】南和男『新編武蔵風土記』解題」（『新編武蔵風土記（足立区編）』、足立区教育委員会、一九八九年）／『小菅初蔵関係文書』葛飾区郷土と天文の博物館、一九九二年）

■竹之塚村・河内氏 つぎに武士の一族として足立の村にいた家をご紹介します。幕府が編さんした大名・旗本の家譜集、『寛政重修諸家譜』

に登場する旗本の河内（こうち）氏です。河内知親（こうち・ともちか）は、竹之塚村の浪人でしたが慶

長十四年（一六〇九）に徳川家康に仕え、甲斐国の代官となりました。知親の子、嫡男の胤盛（たねもり）

は大番士として大坂の陣や島原の乱

に出陣した旗本でしたが、次男の知棟（ともむね）は竹之塚村の名主家、河内久蔵家の祖となりました。

河内兄弟二人に始まる系統は完全に別れずに明治まで続きます。竹之塚村にあった河内久蔵家の屋敷は、そのまま旗本河内家の抱屋敷となり明治まで存続し、明治以降も河内家の屋敷となりました。

名主河内家も旗本河内家の両家とも菩提寺は同じですが、寛永八年（一六三一）、別家の知親の孫、胤次（たねつぐ）のとき五〇〇石が旗本となるとともに竹之塚村延命寺、のち同村西光院が菩提寺としたように、河内一族代々の墓所となりました。

江戸時代の中頃になると旗本河内家は一族が五家に広がり一族合計で一二七〇石の知行所（領地）、七五〇俵の蔵米取となっていました。その中から徳川御三卿（田安、一橋、清水の徳川家）のうち、清水家の重臣となった胤庸（たねもち）、一橋家の重臣となった常誠（つねのぶ）らも登場しました。

竹之塚村の名主家の河内家でも著名な人々が登場します。河内久蔵政武は天明三年（一七八三）の浅間山噴火後の災害救援で活躍し、名字帯刀を認められました。帯刀は本差、脇差の両刀が認められており、名字の使用は代々許されています。

この河内政武は仕官していません

が苗字帯刀する身分の二重性があつたと考えています。

また政武は「臥梅」という号を持ち、文人としても知られていました（本誌一一〇号）。そして娘の糸子は、沼田村（足立区江北）の谷文晁の門人（谷派の絵師）、船津文測の母で、文測自身も幼少期に河内家で暮らしたという文化的にも優れた素養のある家であったことがうかがえます。なお同時代の「河内半蔵」（実名未詳）も文晁の門人となっています。

【参照】「船津家系図」（江北船津家文書）／『新訂寛政重修諸家譜』第十）／『足立区文化財調査報告書』No.12。

■佐野新田・佐野家 現足立区佐野は、江戸時代はじめに佐野新田を開いた佐野家に由来します。村をひらいた佐野家の初代新蔵胤信は、徳川家康の側近で、代官頭・伊奈忠次の家臣として相模国や遠江国で幕府の役人として古文書を残していることから、身分的に武士であったことは確かです。しかし、その後の各世代は江戸時代後期まで幕府役人をつとめています。世襲という形が見られなくなりますが、

世襲ではない武士というめずらしい身分になります。どのような形なのか調べてみると、代々、一代限りの伊奈家家臣（伊奈家士）という在り方です。当主が変わると、「殿

様」たる伊奈家の当主に謁見して、身分が武士となり、鷹場役人や用水役人として代官伊奈家の武士としてつとめるのです。

こうした一代限りの武士、たとえば徳川家の下級武士「御家人」となった人々についてはいくつも事例が知られています。近隣では二郷半領下彦川戸村（三郷市下彦川戸）の有力百姓、千代田家も御家人株を取得して、一代限りの御家人となっています（『浪人たちのフロンティア』郷土博物館、二〇一一年）。

【参照】この項目、郷土博物館蔵、佐野家文書。とくに「奉仕伊奈家由緒書」による。

■広がる郷土層 ここで紹介した三つの事例は、足立区の農村部の郷土たちの代表例です。

そのほかの事例をあげてみると、御三卿の一つ田安德川家に仕官した千住の名倉家、宿場の重役であった千住各町の名主たち、新田開発を進めた東和の河合平内家、文中でも紹介した小右衛門新田の日比谷家、沼田村の船津家もそうです。

次号では、江戸時代を通じて、千住・足立で見られる事例を概観して、郷土足立の特長について考えてみたいと思います。

—つづく
(郷土博物館学芸員)

新常設展示紹介 ④



あだちふるさと食堂

令和七年（二〇二五）にリニューアルした常設展示のなかで、「食」を紹介するギャラリー展示です。

展示の内容に見覚えのある方も多いかと思うのですが、実は前回のリニューアルで登場した「東郊の食」のコーナーで紹介した食べ物、食品サンプルの展示をリメイクしたものです。

各地方からの移住で人口が増加した東京では、地域的に特徴がある郷土料理というものが浮かびにくいなかで、東郊の農村らしさ、市街地化の広がる時代を表す食を紹介したものです。

今回のリニューアルでも、基本的な考え方は変わりません。2階ギャラリーの構造などの制約のなかで、人気のあった食べ物コーナーは再活用することとしましたが、展示の手法をがらりと変えてみました。

食堂のメニューサンプルをイメージ

奥行きのないガラスケースのなかで、これまで平置きで展示していた食品サンプルを、街の食堂のメニューサンプルをイメージして、立てるように斜め置きして見せたらどうかと考えました。

また、解説についても、食堂がメニューをおススメするようなキャッチフレーズや、思わず食べたくなるような説明でまとめることにしました。

結果的に、斜め置きだと二段目に置くメニューに、一段目の影がでて見えにくくなってしまふなどの理由により、垂直に食品サンプルをつけるといふ荒業になりました。クレールのような平べったい食品ならサンプルを垂直に立てることは容易ですが、大皿に盛り上げたサンプルを垂直に取り付けることは大きく負荷が掛かるため、食品サンプル自体の強度やパネルへの取り付け方などに注意を払いました。

新しい食品サンプル

すでにある食品サンプルをリメイクすることは決めていましたが、新しいものも加えようと考えました。

そこで、足立区の名物でもある「おいしい給食」のなかから、株式会社セブンイレブ

ン・ジャパンと足立区のコラボメニューとして二〇二

二年から販売もされるようになった大人気メニュー・えびクリームライスを登場させることにしました。



伊興中学校のご協力で、作りたての給食と食器をサンプル用に提供していただく。

黄桃とゼリーでつくった「不思議な目玉焼き」とカリカリポテトサラダ、牛乳の四品です。

2024年9月10日

給食メニューは、区立の小中学校に通えば9年間食べるもので、大勢の子どもたちが食べてきたものです。

足立区は自校方式で、学校内に給食室があり、各学校に一人配属されている栄養士がそれぞれメニューを工夫しています。また、メニューの検討会を行うなど情報交換の機会もあり、学校ごとに少しずつ違うとはいえ、「足立区の郷土食」といえる存在になっているのではないかと思います。

現役の小中学生には身近な、卒業生には懐かしい味であるとともに、現在は、区外の人も食べてみるチャンスがあるということでえびクリームライスを選びました。

「足立区のソウル

フード」えびクリームライス キャロットライスにえびやキノコのうまみたっぷりのホワイトソース

をかけた大人気メニュー。二〇二二年には、コンビニエンスストアでの販売も。実は、学校ごとのレシピがあり、ちよつとずつ具材や色味が違うんです。」といったメニュー解説に、「昭和五十一年（一九七六）、米飯給食が導入されたことにより、足立区の栄養士たちに開発されたメニュー。一番人気を獲得した歴史あるメニューです。」という付帯解説をつけています。

給食メニューが加わったことにより、家族での見学の際、お子さんが説明をしているような場面も見受けられました。そのほかの食品にも、新たな解説をつけています。博物館でぜひご覧ください。